生徒指導

関わり合う喜びを実感させ，社会性を育てる生徒指導の工夫
― アンガーマネジメントと異学年交流を通して ―

呉市立和庄小学校　寺田　茂雄

研究の要約

本研究は,児童に関わり合う喜びを実感させ社会性を育成する生徒指導の工夫を考察したものである。文献研究から，児童生徒の問題行動の背景に社会性の未熟さがあることが分かった。また社会性は，他者と関わり合うことで育成されることが分かった。所属校の児童は衝動的な感情をコントロールできず，そのまま表出してしまい，友だちとトラブルになることがある。そのため他者や集団との関わり合いが上手くいかないことが多い。そこで，児童にアンガーマネジメントのスキルを習得させ，異学年交流や学級活動で実践，活用させることで，児童は他者と関わり合う喜びを実感すると考えた。さらに関わり合いが上手くできるようになることで，児童の社会性は育成されると考えた。アンガーマネジメントのスキルを習得する学習と異学年交流を通した学習は，児童に他者と関わり合う喜びを実感させ，社会性を育てることへの効果が見られた。

キーワード：関わり合う喜びの実感　社会性　アンガーマネジメント　異学年交流

Ⅰ　研究題目設定の理由

文部科学省（平成22年）は「生徒指導提要」（以下，「提要」とする。）で，核家族化，少子化の進行は，児童の他者との関わり合いを不足させ，「地域社会や学校などで人間関係に一度つまずいてしまうと，なかなか関係を修復できずに孤立する傾向にあることが指摘されています。」[1)]と示している。

小学校学習指導要領特別活動編（平成20年）では，児童の社会性の未熟さがいじめや不登校，暴力行為の一因となっていると示されている。また，このような問題行動を解消するためには，児童に様々な人間関係を経験させる必要があることを挙げ，多様な異年齢の子供たちからなる集団による活動を一層重視すると示されている。

所属校第４学年には，衝動的な感情を抑えることができず,友だちに対して攻撃的な態度をとったり，怒りがいつまでも持続したりする児童が複数いる。これらの児童は集団での活動が上手くできず，遊びや学習の場面でけんかなどのトラブルになることが多い。学級には対人関係のトラブルが多いため，落ち着きがない。６月に実施した他者感情の認知，自己感情の制御，自己感情の表現及び児童の社会性の実態調査の結果を表１に示す。

表１　所属校第４学年　実態調査（31人）

項目		肯定的評価
感情	他者感情の認知	73.3%
	自己感情の制御	52.5%
	自己感情の表現	55.8%
社会性	自己対応	71.9%
	対人対応	75.8%
	状況対応	63.6%

感情では，「自己感情の制御」の肯定的評価は52.5%，「自己感情の表現」は55.8%であった。社会性では集団との関わり合いを示す「状況対応」が63.6%であった。

これらのことから，半数近くの児童が衝動的な感情を抑えたり,適切に表現したりすることができず，また多くの児童が，友だちをつくったり，仲良くしたりすることができていないと考える。

そこで，本研究では第４学年において，衝動的な感情をコントロールするアンガーマネジメントのスキルを習得する学習と,スキルを実践,活用しつつ，社会性を育むことを目的とした異学年交流を行う。アンガーマネジメントのスキルを習得する学習と異学年交流を通して，児童は自己の衝動的な感情をコントロールして他者と関わり合うようになり，関わり合いが円滑になることで，異学年交流において社会性が育つと考える。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

１　社会性

(1) 本研究における社会性

国立教育政策研究所（平成16年）は「『社会性の基礎』を育む『交流活動』・『体験活動』－『人と関わる喜び』をもつ児童生徒に－」で，「学校教育で想定されている『社会性』とは，集団活動の場で自分の役割や責任を果たす,互いの特性を認め合う，他者と協力して諸問題を話し合う，その解決に向けて思考・判断する等の能力や態度であり，さらにはそれらが自らの個性と統合され個人の資質として昇華されたもの，と考えられる。」[2)]と示している。林幸克（2009）は，社会性は「個々人が独力で身につけるものではなく，集団活動を通して，他者とかかわりを持つ過程で初めてはぐくまれるものであるといえる。」[3)]と述べている。また,皆川直凡ら(2010)は，社会性の育成に求められるものを，他者に共感を覚えること,集団の中で調和を保ち協力すること,自己の衝動的な感情を知り，コントロールできること，自分の気持ちを自覚，尊重して納得のいく決断をすることと述べている。

これらのことから，社会性とは，他者や集団と関わり合う態度や能力と，自己の衝動的な感情をコントロールするなどの自己に対する態度や能力と考える。本研究における社会性を表２に示す。

表２　本研究における社会性

自己に対する態度や能力	・衝動的な感情をコントロールする ・自己や他者，集団との関わり合いについて思考・判断する
他者と関わり合う態度や能力	・他者の感情や考えを理解する ・他者に働き掛ける
集団と関わり合う態度や能力	・集団での役割や責任を果たす ・集団のために協力する

(2) 社会性の育ちと「関わり合う喜びの実感」

国立教育政策研究所（平成23年）は「子どもの社会性が育つ『異年齢の交流活動』」（以下，「異年齢の交流活動」とする。）で，児童に人と関わりたいということに対する意欲の乏しさがあるとし，社会性を育成するためには，児童が他者と関わり合う喜びを実感する学習を行うことが必要であると示している。滝充（2009）は，社会性の育成には，児童が他者との関わり合いにおいて，自分を価値のある存在と認識していることや，関わり合いを拒否したり壊したりせず，関わり合うことに対して好意的な思いをもっていることが重要であると述べている。

これらのことから，社会性の育成には，児童が関わり合いに対して好意的な思いをもち，他者と「関わり合う喜びの実感」を得ることが重要と考える。また，関わり合う喜びを実感すれば，児童は他者と関わり合おうとする意欲や関わり合いに対する自信をもち，他者との関わり合いを拒否したり壊したりしないと考える。

(3) 「関わり合う喜びの実感」と「関わり合いに対する自信や誇り」「関わり合おうとする意欲」

国立教育政策研究所（平成23年）は「異年齢の交流活動」で「『人（他の子供）と関わりたい』と思う気持ちは，自らの体験によってのみ，獲得されるものです。他の子供と一緒に遊んだりすることを通して，『人と関わることって楽しい』『人と関わることって苦痛なことではない』と感じるところから『人との関わり』は始まります。」[4)]と示している。また，「『自分から他の人に働きかけられる』『自分は他の人の役に立っている』等の思いや自信，誇り等を感じる」[5)]と示している。

これらのことから,「関わり合う喜びの実感」は，自分は他の人の役に立っているなどの「関わり合いに対する自信や誇り」や人と関わり合いたいという「関わり合おうとする意欲」につながると考える。

２　アンガーマネジメントと異学年交流

(1) 異学年交流

ア　異学年交流と社会性の育ち

「提要」では，児童生徒は様々な集団に所属して活動し多様な人間関係をつくることで，社会の一員としての自覚や責任，協調性，集団の目標達成に貢献しようとする態度が育成されると示されている。滝（2009）は，児童は異学年交流で，自分が果たすべき役割を自覚し，それを果たそうと努力すると述べている。また小泉令三（2010）は，児童が関わり方を考え，年長者としての自覚や思いやりに気付く活動に異学年交流を挙げている。

これらのことから，児童の多様な人間関係の広がりをつくり，人の役に立ちたい，役割を果たしたいという意欲や態度を育むには，異学年交流が効果的と考える。また，社会の一員としての自覚や責任，協調性，集団に貢献しようとするなどの態度は，児童が育むべき社会性と考える。

イ　異学年交流と「関わり合う喜びの実感」

「異年齢の交流活動」では，年長者は異学年交流に主体的に参加し役割を遂行することによって,「関わり合う喜びの実感」を得ることができると示され

ている。滝（2009）は，年長者は異学年の交流活動に主体的に取り組み，役割を自覚してそれを果たすことで，他者と関わり合う意欲を高めると述べている。また，年長者は年少者や教師から感謝やあこがれ，称賛を受けて，関わり合いに対する自信や誇りをもつと述べている。

これらのことから異学年交流で社会性を育てるには，年長者が「関わり合う喜びの実感」を得ることが重要だと考える。また「関わり合う喜びの実感」は，役割を果たし，年少者や教師といった周囲の者から感謝やあこがれ，称賛を受けることでより確かなものになると考える。

図１は異学年交流で「関わり合う喜びの実感」を得る流れである。

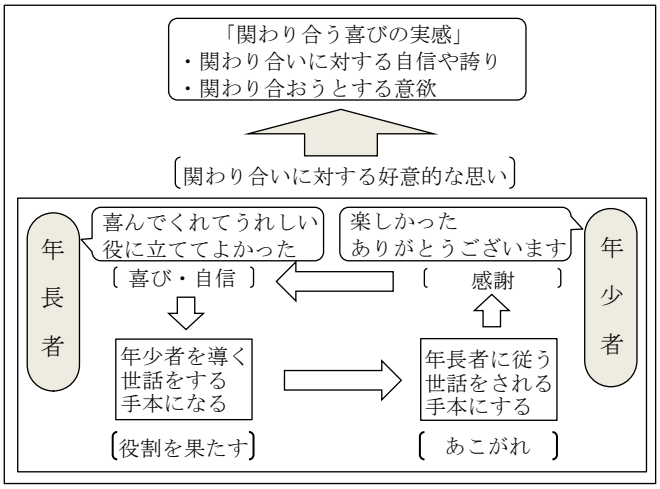

図１　異学年交流で「関わり合う喜びの実感」を得る流れ

(2) アンガー

本田恵子（2007）は，アンガーとは，様々な感情が混濁した結果生じる衝動的なエネルギーであると述べている。湯川進太郎（2010）は，アンガーは「自己もしくは社会への，不当なもしくは故意による（と認知される），物理的もしくは心理的な侵害に対する，自己防衛もしくは社会維持のために喚起された，心身の準備状態」[6]と述べている。

これらのことから，アンガーとは，他者からの自分に対する行為を侵害と認識したときに，自己防衛や社会的な地位の維持などを目的に表出した，自己や他者，集団に対する態度や行動を喚起する，衝動的な感情であると考える。

(3) アンガーマネジメントのスキルを習得する必要性

「教育課程企画特別部会論点整理」（平成27年）では，これからの時代に育成が求められる資質・能力として，「情意面や態度面について，自己の感情や行動を統制する能力や，よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等を育むことが重要である。」[7]と示している。「提要」は，自分の欲求や衝動に従った行為や行動を繰り返すだけでは自身の本意とする結果に行きつけないとし，他者と関わり合うために必要な資質を「自分の欲求や衝動をそのまま表出したり行動に移したりするのではなく，必要に応じて抑えたり，計画的に行動することを促したりする資質」[8]と示している。本田（2007）は，「アンガーマネジメントとは，この行き場のないエネルギーが衝動的に暴走しないよう，行動を自らの意思でコントロールすること」[9]と定義し，小さなアンガーの対処の仕方が周囲と上手く付き合っていく態度を育てると述べている。

これらのことから，児童は，人間関係を自主的に形成し，他者と関わり合っていくことができるようになるために，自己の衝動的な感情をコントロールするなどのアンガーマネジメントのスキルを習得する必要があると考える。

(4) アンガーマネジメントと異学年交流

滝（2009）は，異学年交流を行うに当たって児童が「いきなりキレたり，取り返しのつかないことをしたりすることは，避ける必要があります。」[10]とし，異学年交流に入る前に，他者と上手く関わり合うためのスキルを身に付ける必要があると述べている。湯川（2010）は，自分自身の衝動的な感情とうまく付き合えば，対人関係もうまくいくことが増えるとし，まずは相手を傷付けないために，自分自身の感情や行動をコントロールできるようになるのが望ましいと述べている。本田（2010）は，アンガーマネジメントのスキルを習得させるためには，スキルを実践，活用する場の設定が必要だと述べている。

これらのことから，児童は，アンガーマネジメントのスキルを習得することにより，異学年交流で他者と上手く関わり合えるようになると考える。また，年少者との関わり合い方や役割や責任を果たしたことを，年少者や教師から感謝されたり，称賛されたりすることで，年長者は関わり合う喜びの実感や，関わり合いに対する自信や誇り，関わり合おうとする意欲を得ると考える。これにより，異学年交流の効果はより発揮され，社会性はさらに育まれると考える。また，異学年交流におけるアンガーマネジメントのスキルの実践，活用は，スキルをより定着させると考える。次頁図２にアンガーマネジメントのスキルと異学年交流のつながりを示す。

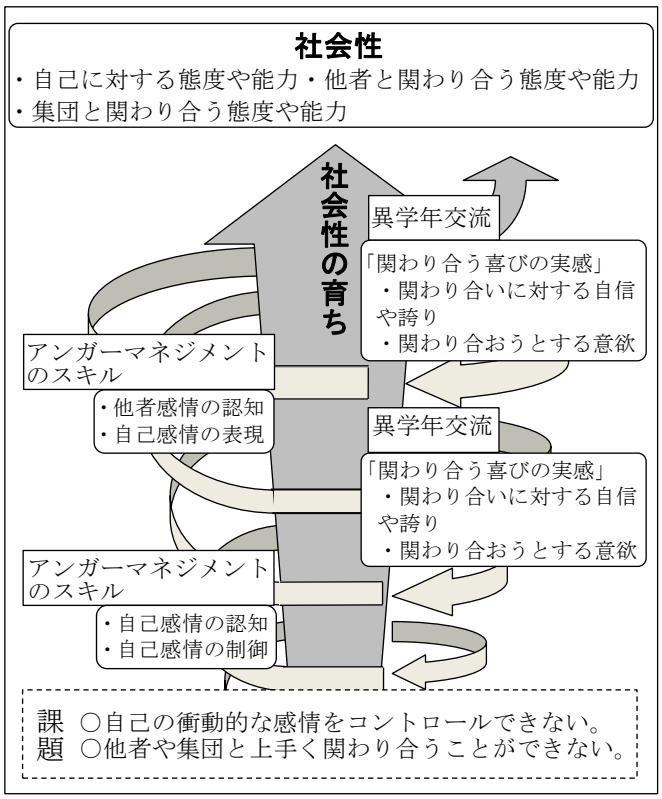

図２　アンガーマネジメントのスキルと異学年交流のつながり

Ⅲ　研究の仮説及び検証の視点・方法

１　研究の仮説

児童がアンガーマネジメントのスキルを異学年交流で実践し，活用すれば，異学年交流や学級での関わり合いは円滑になり，関わり合う喜びを実感し，社会性を育てることができるであろう。

２　検証の視点・方法

検証の視点と方法を表３に示す。

表３　検証の視点と方法

視点①	視　　点	アンガーマネジメントのスキルの習得は社会性の育成につながったか。
	検証の方法	・感情（情動的知性尺度）に係る研究授業前後の評定平均の比較 ・社会性（児童用情動知能尺度）に係る研究授業前後の評定平均の比較 ・研究授業における行動観察 ・ワークシートの記述
	調査方法	質問紙を用いた４段階評定尺度
	対　　象	第４学年児童31人
	実施日	事　前　平成28年６月３日 事　後　平成28年７月８日
視点②	視　　点	児童は「関わり合う喜びを実感」できたか。
	検証の方法	社会性に係る事前・事後調査 研究授業における行動観察 ワークシートの記述

Ⅳ　研究授業

１　研究授業の内容

○　期　間　平成28年６月22日～平成28年７月５日
○　対　象　所属校第４学年（31人）
○　単元名　「なごみマイスター」になろう

２　実施計画

時	学習活動	
事前の活動	感情（情動的知性尺度）と社会性（児童用情動知能尺度）に係る実態調査に回答する。	
第１時	アンガーマネジメント	衝動的な感情を制御したり，切り換えたりする方法について知り，自分に合った方法を選択する。
第２時	異学年交流	前時に学習した衝動的な感情を制御する方法を，第２学年との異学年交流で実践しつつ，所属校のよさを異学年のペアで見付ける。
第３時	アンガーマネジメント	他者の感情を理解し，自己の感情を適切に表現する方法を知る。
第４時	異学年交流	異学年交流で適切な感情表現の方法を実践しながら，所属校のよさをまとめ，発表する。
第５時	他者との関わり合い方を自己決定し，他者との衝突やトラブルを未然に防いだり，解決したりすることについて考える。	
事後の活動	相手の気持ちや立場を考え，自分の感情をコントロールして行動しているか振り返る。 異学年交流で見付けた学校のよさを，全校に知らせる。	

３　研究授業の工夫

単元を貫くキーワードを「なごみ」とし，児童に第２学年との異学年交流や学級活動を通して「なごみマイスター」になることをめあてとしてもたせた。図３に流れを示す。また，他者との関わり合いについて自己決定する場面を設けた。

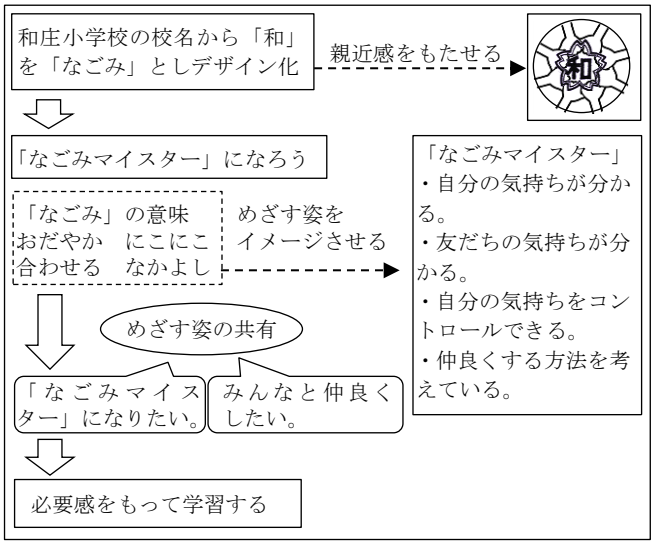

図３　「なごみ」及び「なごみマイスター」の流れ

Ⅴ　研究授業の実際

１　第１時

(1) 学習の展開

第１時「プンプンした気持ちをコントロールできるようになろう」では自己感情を制御する方法を学習した。アンガーマネジメントのスキルの練習をし，自分に合うスキルを選択し，決定した。

(2) 児童の様子

児童は，衝動的な感情の対処の仕方は自他で違うことに気付いた。また，自己感情を制御する方法を知ったことで，他者と関わり合うことに安心感をもった。ワークシートの記述を表４に示す。

表４　ワークシートの記述（一部）

自己	怒った時は，ゆっくり６まで数えることにしました。これで次に怒った時も安心なのでよかったです。
他者	みんなそれぞれプンプンの仕方は違うことが分かりました。私は，プンプンした時はすぐに怒らず，ちょっと考えたいです。
集団	生活の中でも，イライラすることがあったら，今日考えた方法を試したいです。

２　第２時

(1) 学習の展開

第２時「なかよく力を合わせて，和庄小学校の『なごみ』を見つけよう」では第２学年との異学年交流を行った。所属校のよさを「なごみ」とし，異学年のペアで見付け，話し合った。

(2) 児童の様子

児童は，衝動的な感情をコントロールしながら異学年交流を行った。第２学年に優しく話し掛けるなど，年長者として下級生を思いやる姿が見られた。なお，第２学年からは「４年生が行きたいところはどこか，最初に聞いてくれて，優しいと思った。」「４年生を見習いたい。」のような感想があった。ワークシートの記述等を表５に示す。

表５　ワークシートの記述（一部）及び授業の様子

自己	２年生と「なごみ」を見付けているとき，僕は気持ちをコントロールしました。
他者	２年生の気持ちになって考えてみると，気持ちが伝わってきて，仲良くなれました。
集団	和庄小学校には「なごみ」がたくさんあったので，素敵な学校だなと思いました。
関わり合おうとする意欲	初めてで緊張しました。２年生がいろいろな意見を言ってくれました。
関わり合いに対する自信や誇り	２年生がニコニコして私の質問にも答えてくれたのでお姉さんの自覚が出たし，うれしかったです。
関わり合う喜びの実感	２年生はいろいろなことを聞いてくれて本当に楽しかったです。２年生と仲良くなれてとてもうれしかったです。

異学年のペアで所属校のよさ「なごみ」を見付けている様子

３　第３時

(1) 学習の展開

第３時「じょうずな気持ちの伝え方をマスターしよう」では，他者感情の認知と自己感情の表現を学習した。相手の気持ちや立場を尊重しつつ，自分の気持ちや要求を伝える方法を話し合った。

(2) 児童の様子

児童は衝動的な感情をそのまま表現すると，関わり合いが上手くできなくなることを知った。またスキルを習得すれば友だちと仲良くできることに気付き，次時の異学年交流で実践する意欲をもった。ワークシートの記述を表６に示す。

表６　ワークシートの記述（一部）

自己	自分も友だちも傷つかないようにすることや，自分の気持ちは相手に分かりやすく伝えないといけないということが分かりました。
他者	どんなふうに相手に声を掛ければいいのかを考えました。優しい言い方の方が，気持ちを分かってくれると思いました。
集団	僕はみんなで話し合う時に役に立てるんじゃないかと思いました。

４　第４時

(1) 学習の展開

第４時「なかよく力を合わせて，和庄小学校の『なごみ』をまとめて発表しよう」では異学年のペアで所属校のよさをまとめて発表した。

(2) 児童の様子

児童は相手の気持ちを考えつつ，自分の気持ちや考えを伝えるために，アンガーマネジメントのスキルを実践していた。話合いで第２学年に発言を促したり，作業を分担したりして，年長者の役割を果たしていた。アンガーマネジメントのスキルを実践し活用することで，関わり合いが上手くできるようになった手応えを得ていた。なお，第２学年からは「優しく教えてくれてうれしかった。」「私のことを考えてくれたので，楽しくできた。」のような感想があった。ワークシートの記述等を次頁表７に示す。

表７　ワークシートの記述（一部）及び授業の様子

自己	みんなの意見を聞くことはいいことだと思いました。
他者	意見が合わないときに，自分も相手もプンプンしないように考えました。
集団	２年生が３人いたので，リードしていくのは難しいなと思いました。
関わり合おうとする意欲	いつもは２年生とあまり喋らないけれど，この機会にたくさん話しました。また会うときは，いろいろなことを話したいです。
関わり合いに対する自信や誇り	２年生と仲良く話合いができてうれしかったです。仲良くなれました。４年生の誇りができたのでうれしかったです。
関わり合う喜びの実感	２年生がずっとニコニコしていたので，私もニコニコできて，とても楽しい時間が過ごせました。

所属校のよさ「なごみ」をまとめたり異学年のペアで発表したりしている様子

５ 第５時

(1) 学習の展開

第５時の「みんなで力を合わせて『なごみマイスター』になろう」では，班ですごろくをしながら，学校生活で起こり得るトラブルの解決や対処の仕方を話し合った。「なごみマイスター宣言」で，他者や集団との関わり合い方を自己決定し，発表した。

(2) 児童の様子

児童は第２学年からのお礼の手紙をもらい，笑顔で読んでいた。「なかよしすごろく」で児童は急に怒り始めたり関わり合いを拒絶したりすることなく，アンガーマネジメントのスキルを実践，活用しつつ，学級の友だちと楽しく関わり合い，仲良くできることを喜んでいた。ワークシートの記述等を表８に示す。

表８　ワークシートの記述（一部）及び授業の様子

自己	自分の気持ちをうまく伝えるためには，相手に優しくすることが大切だと分かった。
他者	自分の気持ちや相談したいことをはっきり言って，友だちを嫌な気持ちにさせない。
集団	みんなで，カードに書いてある問題を解いて，最後は笑いながらゴールしました。
関わり合おうとする意欲	僕は今まで，嫌なことをされたらすぐに怒っていたけど，これからは，みんなと仲良く接していきたいです。
関わり合いに対する自信や誇り	班でもめごとが起こったけど，「気持ちをコントロールせんにゃあ。」と言うことができました。
関わり合う喜びの実感	気持ちをコントロールすると，とても楽しい毎日が過ごせるようになりました。毎日が楽しく笑顔で過ごせるので多くの人に知ってもらいたいです。

第２学年からの手紙を読んだり「なかよしすごろく」での話合いをしたりしている様子

Ⅵ　研究の結果と考察

１　アンガーマネジメントのスキルの習得は社会性の育成につながったか

(1) アンガーマネジメントのスキルの習得

事前・事後調査と質問項目の結果を図４に示す。

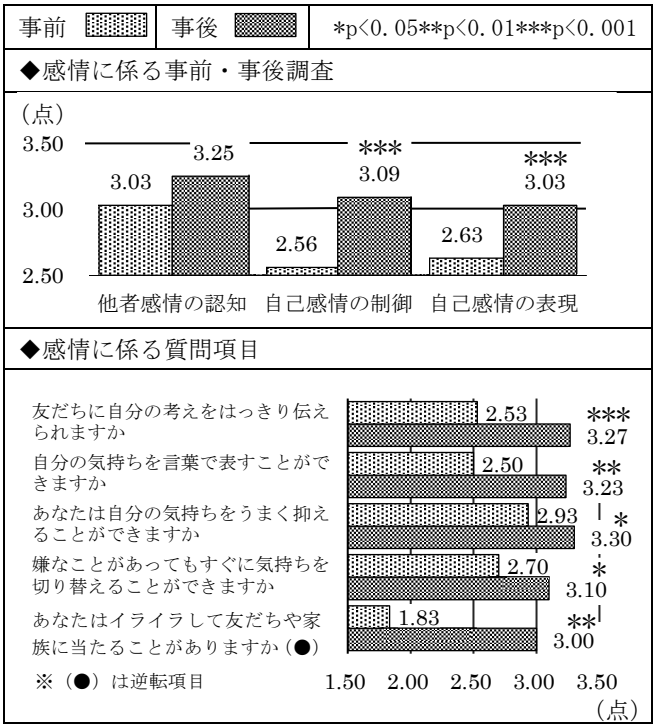

図４　感情に係る事前・事後調査及び質問項目

「自己感情の制御」及び「自己感情の表現」が有意に上昇した。質問項目「友だちに自分の気持ちをはっきり伝えられますか」が上昇した。異学年交流や学級活動の振り返りの記述に「プンプンした気持ちにならなかった。」「気持ちをコントロールした。」などが見られ，児童は「自己感情の制御」と「自己感情の表現」のスキルを実践し，活用していたと考える。また，「あなたはイライラして友だちや家族に当たることがありますか」が上昇したことから，児童は，日常生活においても，衝動的な感情をそのまま表現して行動することがなくなったと考える。アンガーマネジメントのスキルを異学年交流で実践したことで，児童は関わり合いが上手くできるようになったことを実感している。このことが，さらに

スキルの定着を促進したと考える。また，習得するスキルを「自己感情の制御」「他者感情の認知」「自己感情の表現」としたことは，異学年交流で実践しようとする意欲となったと考える。異学年交流を経て，児童は学級でもアンガーマネジメントのスキルを活用して他者と関わり合うようになっている。

これらのことから，児童はアンガーマネジメントのスキルを習得したことで，衝動的な感情をコントロールできるようになったと考える。

(2) 児童の社会性の育成

事前・事後の質問紙調査及び質問項目についての結果を図５に示す。

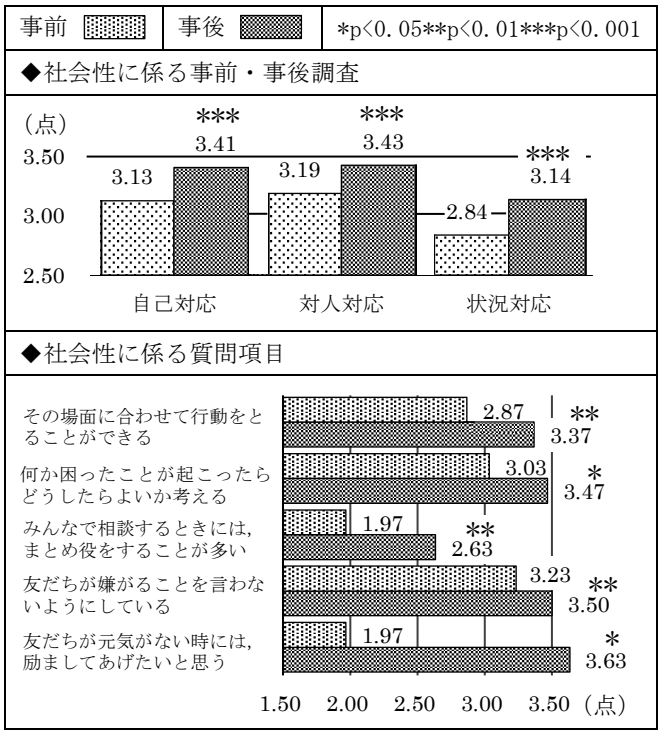

図５　社会性に係る事前・事後調査及び質問項目

社会性では，すべての因子で有意な上昇があった。質問項目「みんなで相談するときはまとめ役をすることが多い」「その場に合わせて行動することができますか」「何か困ったことが起こったらどうしたらよいか考える」の上昇は，異学年交流で年少者を導きリーダーを務めるなど，年長者の経験をし，役割を果たしたためと考える。「友だちが嫌がることを言わないようにしている」「友だちが元気がない時には，励ましてあげたいと思う」の上昇は，アンガーマネジメントのスキルを実践する場に異学年交流を設定し，スキルが定着，強化されたことで，他者との関わり合いが円滑に行われるようになり，その結果，他者や集団との関わり合い方について考えるようになったためと考える。

これらのことから，異学年交流や学級活動でアンガーマネジメントのスキルを実践，活用したり，役割や責任を果たしたりしたことが，集団や他者に対して関わり合う態度や能力を高め，児童の社会性は育成されたと考える。

(3) アンガーマネジメントのスキルの習得による社会性の育成

以下に第５時の児童の自己決定の記述を記す。

・自分の気持ちをコントロールして，これからはプンプンしないようにしたいです。
・前は腹が立つことがあったら気持ちを抑えることができなかったけど，これからは自分の気持ちをコントロールできそうです。
・もしカッとなっても，人を責めないようにする。
・「なごみマイスター」になったから，穏やかでニコニコして，柔らかい心をもって人に合わせて，けんかをしてもすぐに仲直りができるようになりたいです。
・友だちがいじめられていたら，勇気を出して止めます。
・自分の気持ちをコントロールして，友だちや自分の気持ちをしっかり考えて「なごみマイスター」として生活していきたいです。
・誰にでも優しくして仲間外れをせずに生活したいです。

第５時における自己決定の記述（一部）

記述には「自分の気持ちをコントロールしたい」など，自分の衝動的な感情の対処の仕方の他に，「すぐに仲直りできるようになりたい」「友だちがいじめられていたら勇気を出して止める」などの他者や集団との関わり合いに対する態度や能力に関する自己決定が見られた。また，異学年交流や学級活動で，アンガーマネジメントのスキルを積極的に実践，活用している姿が見られた。単元を貫くめあてを「『なごみマイスター』になろう」としたことで，児童は目指す姿を具体的にイメージし，アンガーマネジメントのスキルを習得する必要性を感じて学習に取り組んだと考える。アンガーマネジメントのスキルを習得したことで，児童は他者との関わり合いが円滑にできるようになり，関わり合う喜びを実感した。このことが関わり合いに対する自信や関わり合おうとする意欲にもなり，社会性を育んだと考える。

これらのことから，児童はアンガーマネジメントのスキルを習得したことにより，自分自身がどのように他者や集団と関わり合うか，その態度を自己決定することができ社会性は育成されたと考える。

２　児童は「関わり合う喜びを実感」できたか

社会性に係る事前・事後質問紙調査から「関わり合う喜びの実感」に関わる質問項目の平均値の変容及び振り返りの記述を図６に示す。

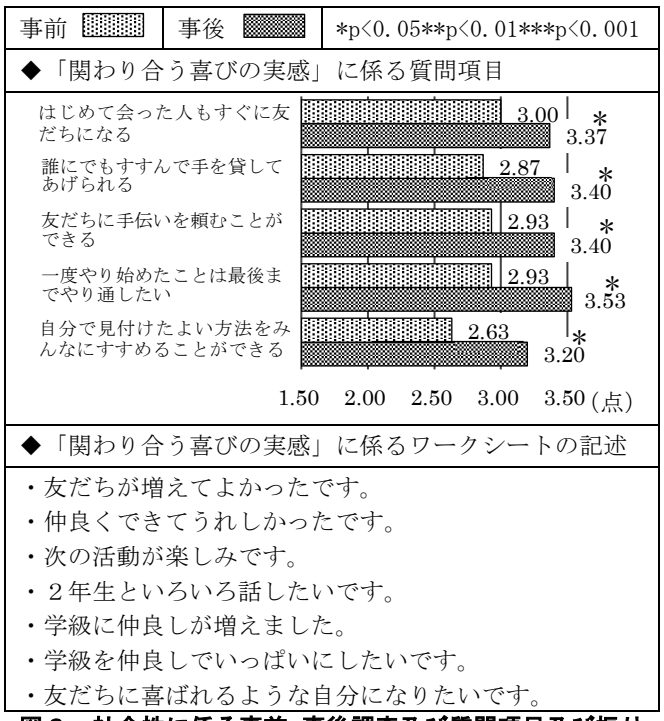

図６　社会性に係る事前･事後調査及び質問項目及び振り返りの記述

質問項目「はじめて会った人もすぐに友だちになる」「誰にでもすすんで手を貸してあげられる」から，児童の他者と関わり合おうとする意欲，他者と関わり合うことに対する自信や誇りの向上が見られた。ワークシートには，友だちが増えたことを喜ぶ記述や，仲良くできたことをうれしく思う記述があった。第５時には，第２学年からの手紙を笑顔で読み，異学年交流での関わり合いを喜んでいる姿が見られた。また，「なかよしすごろく」では，友だちとハイタッチをしたり，身を寄せて話し合ったりしていた。これらは，衝動的な感情をコントロールできたことで他者との関わり合いが円滑になった姿だと考える。また,第２学年からお礼の手紙をもらったことや教師から称賛されたことで，他者と関わり合うことに対する好意的な思いをもつことができたと考える。

これらのことから，アンガーマネジメントのスキルを習得することにより他者との関わり合いが円滑になり，児童は異学年交流や学級活動で関わり合う喜びを実感したと考える。

Ⅶ　研究の成果と課題

１　研究の成果

○　異学年交流や学級活動でアンガーマネジメントのスキルを実践し，活用することで，児童は衝動的な感情をコントロールできるようになり，他者との関わり合いが円滑に行えるようになることが分かった。

○　アンガーマネジメントのスキルを習得したことで，児童は他者との関わり合いにおいて「関わり合う喜びの実感」を得て，自己，他者及び集団とどのように関わり合うか考えることができるようになり，社会性が育つことが分かった。

２　研究の課題

○　自己感情を適切に表現するスキルの習得に児童は難しさを感じていた。状況や場に応じ，相手や自分の立場を尊重した感情表現を身に付けるには，ショートプログラムを用いるなどして，計画的かつ継続的な指導が求められる。

【引用文献】

1)　文部科学省（平成22年）:『生徒指導提要』教育図書p. 209
2)　国立教育政策研究所（平成16年）：『「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」－「人と関わる喜び」をもつ児童生徒に－』p. 8
3)　林幸克（2009）：『改訂特別活動概論』久美pp. 16-17
4)　国立教育政策研究所（平成23年）：『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」』p. 3
5)　国立教育政策研究所（平成23年）：前掲書p. 7
6)　湯川進太郎（2010）:『コミュニケーションと対人関係』誠信書房p. 155
7)　文部科学省（平成27年）：『教育課程企画特別部会論点整理』p. 12
8)　文部科学省（平成22年）：前掲書p. 11
9)　本田恵子（2007）：『キレやすい子へのソーシャルスキル教育教室でできるワーク集と実践例』ほんの森出版p. 8
10)　滝充（2009）：『改訂新版ピア・サポートではじめる学校づくり小学校編 異年齢集団による交流で社会性を育む教育プログラム』金子書房p. 21

【参考文献】

文部科学省（平成20年）:『小学校学習指導要領特別活動編』東洋館出版社
皆川直凡・片瀬力丸・大竹恵子・島井哲志（2010）：『児童用情動知能尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討』鳴門教育大学研究紀要第25巻
国立教育政策研究所（平成23年）：『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」』
滝充（2009）：『改訂新版ピア・サポートではじめる学校づくり小学校編 異年齢集団による交流で社会性を育む教育プログラム』金子書房
小泉令三（2010）：『よくわかる生徒指導・キャリア教育』ミネルヴァ出版
本田恵子（2007）：『キレやすい子へのソーシャルスキル教育』ほんの森出版
湯川進太郎（2010）：『コミュニケーションと対人関係』誠信書房
本田恵子（2010）：『キレやすい子へのアンガーマネジメント段階を追った個別指導のためのワークとタイプ別事例集』ほんの森出版